

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (53) 祭司としてのサムエル

サムエルはエフライム族の人間ですから、嗣業としては祭司ではありません。けれども胎内にいる時からナジル人として、母ハンナに育てられました。乳離れするとすぐ神殿に連れて行かれ、祭司エリのもとで神に仕える人として訓練を受けたのです。本来は下働きの仕事を引き受けるべき人間でしたが、サムエルの信仰により、神の言葉を聞く人として、エリに認められ、イスラエル全体から尊敬を受けるほど、預言者としてめざましい働きをしたのです。

恩師のエリが祭司になったのは 58 歳、そこへ幼子サムエルが住み込んで働き続けました。98 歳でエリが死にましたから、サムエルが祭司となったのは 40 歳を過ぎたころだったでしょう。それから 20 年平穩に過ぎました。サムエルが 60 歳を過ぎた頃、民の求めにより、サウルを王として選びました。サムエルにとって王制は悪であり、ただ、次の条件でのみ許されることでした。

あなたたちが主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の御命令に背かず、あなたたちもあなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならそれでよい。(サム上 12:14)

サムエルは士師としての指導者の地位を王のサウルに譲り渡し、祈ることに専念したのです。ところが、サウルは祭司であるサムエルの言葉に聞き従わず、自分で祭司の務めを勝手に行う、戦利品に心奪われる、戦勝碑を建てるなど、主の命令に背き続きました。サムエルは深く心を痛め、夜通し主に向かって叫んで祈りました。そして、サウルは王位から退けられると本人に伝えたのです。



サムエル、ダビデに油を注ぐ Dura-Europos Synagogue (シリア)

やがてサムエルはベツレヘムに住む、イスラエルの長老であるユダ族のエッサイに 8 人の息子がいることを知って、彼のもとを訪ねました。そこで主の言葉、

「容姿や背の高さに目を向けるな。…人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」(サム上 16:7)

によって、羊飼いをして家族の手伝いをしていた末息子、少年ダビデにイスラエルを託す王の姿を見たのです。そしてダビデを選び、油を注ぎました。この時、サムエルは 70 歳を過ぎていて、ダビデは 13 歳くらいでしょうか。油を注がれた日から、主の霊が激しくダビデに降るようになったと記されています。

サムエルはサウルにしたように、ダビデにも神の言葉を語り伝えたのだと思います。

「油を注ぐ」とは人間でも物でも「聖別する。神のために特別に用いる」という意味です。油を注がれた時に、ダビデも、彼の家族、兄たちも、将来ダビデが王となるという事を、まったく思いもしなかったでしょう。ただ、ダビデは神に仕える人間としての自覚を深めたという事になるのでしょうか。

その後ダビデは兄達と同様、サウル王に仕え、忠実な家臣、勇敢な兵士として働き、民全体からも賞賛され始めました。一方、サウルはダビデの力を恐れ、敵意を抱き、ダビデを殺そうとするのです。

やがて、サムエルは死に、国中が悼み悲しみました。一方、ペリシテ人は集結しました。サウルは恐れおののき、とうとう口寄せに頼み、サムエルを呼び出してもらいます。サムエルは、

主は、わたしを通して告げられた事を実行される。あなたの手から王国を引き裂き、あなたの隣人、ダビデにお与えになる。(サム上 28:17)

とサウルの幻の中で、ダビデの名を挙げて、はっきりとサウルに神のみ心を伝えたのです。